

〔魂の配慮〕

延世大学の創立と日本の協力者たち

趙 載国

聖句（ガラテヤ人への手紙六章九節、協会口語訳より）

「わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになる。」

説教

この度、私たちは、日本の歴史や文化を誇る四国に来ることができ、また四国学院大学を訪問することができたことに感謝いたします。その昔、神様のみ旨にしたがつて四国のこの地に来られ、四国基督教学園（学院の前身）を設立し、日本の若者たちのために教育の労を尽くしてくださった宣教師たち、そしてそれに協力した日本人の先生たちに敬意を表したく思います。一九四九年、四国学院の創立に際して、J・A・マカルピン、W・A・マキルエン、L・W・モ―

ア先生たちは、この地において戦争の傷を癒し、平和な日本を築いてくれる青年たちが育つことを願っておられたと思います。^①

私の勤める韓国の延世大学も一八八五年、一三〇年前にアメリカの宣教師たち、主に北米長老会より派遣された先生が作ってくださったキリスト教主義学校です。そのとき、H・N・アレン (Horace Newton Allen, 1858-1932) 先生が最初の宣教師として朝鮮にこられ、病院と医学校を作り、一九〇八年に七人の卒業生を出します。そして彼らは最初の医師免許を頂いて、キリスト教の信仰をもつて病人治療のために活躍します。当時、日本の植民地時代でしたので、独立運動にも参加しました。

その後一九一五年、今より約一〇〇年前にH・G・アンダウッド (Horace Grant Underwood, 1959-1916) 宣教師が「朝鮮基督教学校」という名の大学を設立して、青年たちに一般の学問を教え、朝鮮の未来を備えたいと言いました。アンダウッド先生は翌一九一六年、日本語の学習のために東京に行きましたが、病気になりアメリカに帰国、そこで惜しくも亡くなりました。その時、医学校の校長を務めておられたO・R・エビソン (Oliver R. Avison, 1860-1956) 先生が後任の校長になり、寄附行為を作成し朝鮮総督府に学校法人登録をし、また現在の三〇万坪の校地を購入して、太平洋戦争終結後に医学校と合わせて延世大学になりました。今、延世大学には、学部生二万七四四四名と大学院生一万一九五八名を合わせて約四万名が学んでおり (二〇一五年四月現在)、日本人留学生も一〇〇名以上来ています。韓国は、日本より遅れて西欧文明を受け入れることによって高等教育も少し遅れましたが、延世大学は「ヨハネによる福音書」八章三二節に記された「真理と自由」^②をもつて若者たちに近代学問を教え、多くの卒業生たちが韓国社会や国際社会のために活躍しています。

私達は、延世大学の設立と発展はひとえに神様の御導きであると考えていますが、その昔、学校の創立期において大いに協力してくださった日本の方々を忘れることができません。主に朝鮮総督府の官吏たちの中でも、キリスト者たちが、アンダウッドとエビソンを助けて、学校の設立を可能にしてくれました。第一回目の学校理事に加わった日本人が二人います。一人は渡辺暢 (なつみ) (一八五八―一九三九) さんともう一人は坂出鳴海 (なるみ) (一八七六―一九二八) さんであります。

渡辺さんは朝鮮の高等法院長であり、夫人の達子さんは日本基督教会婦人伝道会社の社長を務めていました。渡辺さんは、明治学院の法人登録のときも、法律家として参加しておられ、また同理事を務められた方です。彼は明治学院の寄附行為を紹介してくださり、我が延世大学の寄附行為におけるキリスト教主義教育に関する条項は、法人を解散しない限り修正できないものにしてくれました。後に渡辺さんは、主にキリスト教の有志たち、すなわち三・一独立運動を起こしたとして国家反乱罪の疑いで検挙された民族代表たちに、無罪を言い渡しました³。彼は、朝鮮の人が自分の国の独立を願う主張するのは自然な思いであり、裁かれないという考えでした。また坂出さんは、東京大学を卒業して、朝鮮総督府の土木課の課長として延世学校の校地や校舎を備えていく際、大きな支えになってくれました。今の延世大学の敷地は、一九一七年購入したのですが、当時、日本の東洋植植会社の土地や王族のお墓が含まれている山林でした。その土地は、是非とも購入して、校地にしたい場所でした。そしてその代金は、アンダウッド先生の兄で米国の有名なアンダウッド・タイプライター会社の社長が、アンダウッド先生が亡くなる前に寄付してくださった資金でまかないました。そしてエビソン先生は、キリスト者である坂出さんとその上司である内務部長官宇佐美勝夫（二八九六・一九四二）さんの協力を得て、その土地を手に入れることができました。当時、一〇〇名位の学生たちのために三〇万坪の土地ですから、彼らの夢の大きさが感じられます。坂出さんは、仁川港と大阪港を設計した技士として知られています。そして我が大学の設立に当たって、チャペルと聖書講義が行えるように助けてくれた方は、誰であろう総督府の学務局長である関屋貞三郎（二八七五・一九五〇）^{ていさぶろう}さんでした。奥さんの衣子さんは伝道婦人として朝鮮の結核患者たちのために奉仕をされ、長男の正彦（一九〇四・一九九四）さんは牧師になりました。

愛する友の死に遭って、その遺志に従い、また日本人たちの協力を得て、我が大学を設立したエビソン先生が愛読した聖書箇所は、ガラテヤ人への手紙六章九節の「わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになる」であります。私は、善き業のために努力しておられる宣教師たちのために、神様が良き隣人である日本人たちを用意してくださったと思っています。我が大学がその名を誇り、我が卒業生たちが母校を考えると、必ず覚えてほしいのは、宣教師たちと共に善き働きをなし、倦み疲れることなく助け、大いなる刈

入れを可能にしてくれた日本人キリスト者です。グローバルな世界と時代に生きる皆様も、その昔、大変な時代において希望に満ち溢れる未来を夢見た先覚者たちの信仰に習い、世の光・地の塩として貴重な役割を果たされるよう祈ります。

〔編集者注〕

本稿は、延世大学の宗教部長であられる趙先生と他五名のチャプレンの先生方（神学博士）が、四国学院大学を表敬訪問された際に、チャペルをご担当いただいた趙先生の説教である。規模もレベルも異なる延世大学から六名もの先生方が、国際交流を兼ねて二〇一六年一月一日から二三日まで四国学院に滞在されると伺ったときは、驚きを隠せなかった。しかも、昨今の日韓のぎくしゃくした関係の中、趙先生のチャペルは、趙先生をはじめ延世大学の皆さんが、どれほど信頼に値する良心的な知識人であるかを表している。歴史的事実に目を向け、客観的に評価される姿に、満腔の敬意を表するのみならず、日本人として衷心よりの感謝を表したい。親日罪や反日教育を超えて、趙先生の勇氣ある発言によって、本当の日韓交流をここから始めることができる礎を備えていた、いたった一杯であった。とりわけ、説教のなかでも言及された渡辺暢、坂出鳴海、宇佐美勝夫、関屋貞三郎らは一般市民ではなく、当時、朝鮮総督府の高級官僚であったことを鑑みれば、延世大学創設の際に協力したこれら日本人の働きがもつ朝鮮統治の歴史的意味を深く考えさせられた。

ここで、趙載国先生の略歴を記しておく。趙先生は、一九五三年、韓国忠州生まれ。延世大学卒業（一九七九）、同志社大学大学院神学研究科博士課程修了（神学博士、一九九五）。その後、大阪平野教会牧師（在日大韓基督教会、一九九〇）、韓国基督教社会問題研究所研究室長（一九九六）、安養大学教授（二〇〇〇）を歴任し、延世大学教授（二〇〇四―現在）、同宗教部長（二〇一四）、同大学教会牧師（二〇一四―現在）に至る。また韓国実践神学会副会長（二〇一五―現在）をも勤める。

日本語の著書に、『韓国の民衆宗教とキリスト教』（新教出版社、一九九八）があり、日本人研究者の著作の韓国語訳として栗林輝夫『荊冠の神学』（茶山グルバン、一九九四）、山折哲夫『近代日本人の宗教意識』（小花、二〇〇九）、谷川健一『日本の神々』（延世大出版部、二〇一四）がある。その他、韓国語の編著書として、本稿にも深く係わる、以下の研究がある。『延世の開拓者たちと延世学風』（延世大出版部、二〇一五）、『キリスト教大学の規定と教育活動』（信仰と知性社、二〇一六年二月）、『韓国教会海外宣教の先駆者たち』（信仰と知性社、二〇一六年一月）。以下は編集者の脚注である。

注

- （１）四国学院の場合、南部長老会（派）のミッションボードによる創設であった。同じく南部長老派によつては、一八八九年に名古屋で金城学院（旧金城女学校）が創設された。また北部長老派によつては、一八八五年に金沢で北陸学院（旧金沢女学院）が創設されている。
- （２）ヨハネによる福音書 八章三一、三二節（協会口語訳）を引用する。
「イエスは自分を信じたユダヤ人たちに言われた、『もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう』」。
- （３）無罪判決が出たわけではない。反逆罪ではなく、軽い「騷擾罪」（当時）で有罪判決が下された。しかも執行猶予付きで、実刑が伴わなかったようである。